
ツギハギ

ハラダ ナオコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツギハギ

【Zコード】

Z4846E

【作者名】

ハラダ ナオコ

【あらすじ】

僕らはみんなツギハギだらけで生きている。

始まりは。

ポタリと首筋に雫が落ちてきた。

(雨が降るはずがない。だつて「ハハ」……)

ポタリ、ポタリと雫が落ち続ける。
不思議に思つて上を見上げた。

(だつて……だつて、「ハハ」……)

「うああああああああああッ……」

(「ハハ」は、僕の家なんだから)

「ひ、あ……かあさん、とうや、ん……」

見上げると、今度は頬に雫が落ちてきた。
僕が、震える指先でソレに触れればヌルリと嫌な感触がする。
暗い部屋で月明かりに照らされたソレは。
紛れもなく紅く、艶めいていた。

「な、んで」

(何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で
で、どうじて!?)

(どうして母さんと父さんが死んでるの？)

瞳から暖かい雫があふれ出て、頬が引きつり喉が痛む。

気がついたら、僕は大声を上げて泣いていた。

天井には長い刀が突き刺さった母さんと父さんがいて。

僕は2人の血に染められながら泣いた。

幼い脳は、現実を打ち消すそこに楽しかった思い出を浮かばせて、
僕はさらに泣き喚いていた。

そして僕が血の雨から救い出されたのは、翌日の午前10時頃だった。

今は。

さわさわと心地よい風が頬をなでる。

ふと、桜の花弁が目の前を横切った。

「…あれからもう、8年か」

父さんと母さんが死んだ、あの日。

僕はまだ、10歳だった。

そして、今。

あれから8年。

18歳になつた。

特に歴史に残るほどの変化はなく、まあ…あえて言つなら、科学技術がさらに進歩したことくらいで。

人々は相変わらず個人飛行車や団体飛行車に乗つて光でしかれた道路を行き来し、僕の前を横切つた桜の花弁はクリーンロボットに消去される。

かつて、戦車や核兵器が存在していたなんて信じられない世界だ。

僕達からすれば、ナイフや拳銃は勿論、家庭包丁まで制限されているこの世界に戦車や核兵器と呼ばれるモノが存在していた事は、不思議でしかない。

…そう、不思議だ。

ナイフや拳銃、家庭包丁まで制限されているのに。

なぜ、

なぜ

父さんと母さんは日本刀を刺されて、

死んでいたんだろう？

まあ、今更な事だけれど。

ヘンなの。

まあ…いいや。

今更だし。

それじゃあ…僕は、今から殺人者を探しに行つてきます。

……………とつあえず、気楽に行こー。

そして

とある組織のアオイ寮。

僕が立つてこの窓口付近には、

『押してください』

と書かれた文字が繰り返し現れは、消えて行く。

そして、その文字の横には黄色いボタンがあるが、その下には手書きで

『緊急時のみ』

と書かれている。

押すべきか、押さざるべきか……

悶々と悩むが、

まあ結局押さないわけにはいかないだろ。

自分の部屋、知らないし。

管理人に聞けって言われたし。まあ、それに…

「あいさつくらいは…しないと、ねえ？」

礼儀は大切だ。

と、自分で自分に言い訳をつき、黄色いボタンを押した。

『タラララッタター！！』

…え。

『タ、タラ、タララ……テツ テレーーーーーーーー！』

…無駄に大音量で、なんかレベルアップした時の効果音が流れた。

しかも、四回、諦めた（？）し。

…何故だ。

いや、別にいいけど。

いいけど、ねえ？

オカシイだろ。

そして、僕は待った。

待ちましたよ。

寮の管理人サンを…。

でも、

「来ないじゃん…」

これが緊急時だったらどうするんだ?

つか、

『もう押しかけてもいいですか?』

いいですよ。

『ありがとうございます。』

自分で自分に問いかけ、勢いをつけて

おもいつもり扉に飛び蹴りをくらわす。

ガコッ ! ! ! !

「 つゝ … ! ! いつてえ … 」

あ、足折れたって ! !

絶対 ! !

…まあ、ムリがあることは最初から分かっていたさ。

押しかけるとはいつてもこの「時世」、部屋には厳重にセキュリティがかかっている。

そりゃーもう

指紋・声音・虹彩・血流…

それから、□□では特にナンバー照合がある。

だから、入寮する前に身体のどこかに特別な機械でナンバーを書かれるのだ。

いや、書かれるといつより彫っているのだろうか？

一昔前の刺青のよくな…けれど触感は普通の肌となるべく変わらない。

痛くもなかつたし。

けれど、一生消えないらしい。

まあ、裏を返せば裏切ろうとしたって無駄つーことなんだろうけど。

だから、やっぱり相手が出てくるまで待つしかない。

と、ついでに簡単に「この扉は開かないし、壊れないのだ。

でも僕はココまでの道のりで、ヒツジゴーに疲れてるー。

そりゃーもお野を越え、山を越え、海を越え、谷を越えてココまで来たのだ。

……早く、寝たい。

今まで

待つこと更に、15分。

「はははは、つーこと俺は言つてやつたわけ』お前ソレ、ヘビ
じやなへ//ミズだら~』つてな

「えーそれホントか?ありえない」

ほとんど無音で扉が開いたと思つたら、

バカっぽい男とアホっぽい女の笑い声が聞こえてきた。

「こや、マジ本當だつて……んでもある…………誰、お

前

「いやいや、アナタが誰ですか?」

男の方が俺に気づいて眉をしかめる。

の方も見知らぬ俺に不快感を感じたらしい。

これ見よがしにイチャイチャと腕を組み、俺をこりみつけてくる。

「…俺あ、『』の寮監の亞妻だ。お前は？」

「俺は、今日から『』に入寮する篠です」

「今日、入寮でカガリ……？そーいやそんな奴いたなあ。わりいわ
りい、忘れてたぜ」

アンタそんなんで寮監つとまるんですか…。

呆れてモノも言えません。

「……まあ良いです。鍵下さい」

そう、俺の今の最優先事項は『寝ること』だ。

取り合えず部屋に行きたい。

「あー…鍵な。ちょっと待つとけ」

「はい、早くし」「ちょっとおジユウ、早く遊びに行こよー」

えええー…今、俺が喋つてたじゃん。

遊びとかより鍵のが大事でしょー。

「はいはい、ちょお待つとけって。あ、あつたコレか?」

毎日クリーンロボットが掃除しに来てるはずなのに向で探すのに時間がかかるんだ。

まだまだ改良の余地があるつーこと。

それか一日で部屋をすんじゃ散らかせるつてある意味才能？

まあ、どちらでもイイけど。

「あつがとうござります」

「おー。部屋は鍵にも書いてあるけどー071号室だからな。間違
えんなよー」

まあ、間違えても開かないケドな。と言つて寮監は女と腕を組み
ながらどつか行つた。

…なんか最後までテキトーな人だな。

女好きそーだし。

てか、「**男子寮**なのに女連れ込んでいいのか？

いや、まあ男子寮だからいいや女を連れ込むんだけど……。

まあ、俺には関係ないか。

とつあんず寝に行いつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4846e/>

ツギハギ

2010年11月21日03時32分発行